

## 東南アジアの開発 / 発展におけるNGOの役割 - タイ と東ティモールの場合(2) -

著者	小鳥居 伸介
雑誌名	長崎外大論叢
号	3
ページ	41-51
発行年	2002-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1165/00000307/">http://id.nii.ac.jp/1165/00000307/</a>



# 東南アジアの開発／発展におけるNGOの役割

## —タイと東ティモールの場合（2）—

小鳥居 伸 介

### 1. 問題の所在

### 2. タイの開発／発展とNGO

- (1) タイの開発／発展の歴史と概況
  - (2) タイのダム・水域開発とその社会・文化的影響
  - (3) タイのオルタナティブ教育とNGO
- (以上前号)

(以下本号)

### 3. 東ティモールの開発／発展とNGO

- (1) 東ティモールの歴史と現状
- (2) 東ティモールの開発／発展の課題とNGO

### 4. 東南アジアの開発／発展におけるNGOの役割

(完)

### 3. 東ティモールの開発／発展とNGO

#### (1) 東ティモールの歴史と現状<sup>(1)</sup>

東ティモールの開発／発展とNGOのかかわりについて述べる前に、まず16世紀から現在にいたるまでの東ティモールの歴史と現状について、簡単にまとめておこう<sup>(2)</sup>。

ティモール島はオーストロネシア系、パプア系のさまざまな民族からなる多民族地域であるが、ポルトガルが到来する16世紀以前には、西のティモール語を話すアトニ人と東のテトゥン語を話すベル人の二つの王国に分かれていた。この勢力区分が植民地時代のオランダ（西ティ

モール)とポルトガル(東ティモール)による領土分割に利用された。

東ティモールは16世紀初頭、ポルトガルの植民地となって以来、カトリックが布教され、公用語はポルトガル語、現地人の共通語としてはテトゥン語が使用されてきた。ポルトガル時代には数度にわたって、コーヒーの強制栽培や強制的な課税に反対する住民たちによる反植民地主義の反乱が起こされた。その後も、日本軍(1942~45)による占領、ポルトガルによる再植民地化(1945~74)、インドネシアによる併合(1976~99)という、長い他民族、外国による支配が続いた。

東ティモールによろやく独立のチャンスが訪れたのは、インドネシアのスハルト政権が倒れた1998年からおよそ1年後のことである。1999年8月30日の住民投票による独立決定、それに続くインドネシア軍と民兵によって引き起こされた9月騒乱、その後の国連による暫定統治を経て、2002年5月20日、東ティモールは長い苦難の末に、ついに東ティモール民主共和国として、正式に独立を宣言した。

ポルトガル時代の東ティモールでは、教育の機会は限られた層にしか与えられず、道路などのインフラも整備されないまま、人々の暮らしは苦しく、経済発展は停滞していた。インドネシアによる併合後は、いわゆる「インドネシア化」が進められ、インドネシア語による教育が普及し、インフラの整備、開発も行われたが、民衆への恩恵はほとんどなく、開発の成果は権力に近いエリート層に偏っていた。そして東ティモールの独立を望む人々に対しては厳しい弾圧、虐殺など、数々の人権侵害が行われた。

開発、発展という観点から観た時、東ティモールには天然資源が乏しく、コーヒーの他にめぼしい産業もないため、今後の展望は楽観できない。また、1999年9月の住民投票による独立決定後のインドネシア軍や併合派の民兵による暴力、破壊により、インフラは破壊され、産業、教育など、すべてにおいて、マイナスからの出発を余儀なくされている。こうした状況の中で、国連暫定統治下において、日本も含めた各国の国際NGOおよび東ティモール国内のNGOが東ティモールの復興のために尽力している。

以下では、筆者が2001年8月のPARCによるスタディ・ツアー参加時に得た情報に基づき、東ティモールの復興と発展のために活動する現地NGO・住民組織およびPARC自身の支援活動について紹介しよう。

## (2) 東ティモールの開発／発展の課題とNGO<sup>(3)</sup>

〈人権NGOの活動①：YAYASAN HAK(人権協会、以下YHと表記)の場合〉

以下は、YHコーディネイターのジョセ・ルイス・デ・オリヴェイラ(Jose Luis de Oliveira)氏の談話の概要である。

YHは東ティモール人の知識人、活動家たちによって1997年に設立された人権擁護団体であ

る<sup>(4)</sup>。住民投票前は閉ざされた社会の中で、政治的な人権侵害があったが、投票後は前の状況とは異なり、新しい人権問題が起こってきた。基本的人権侵害はインドネシア以前、ポルトガル時代からあった。現在は労働者の人権の問題（労働条件、賃金について、例えばオーストラリアの企業などが入り、現地の法律を知らないと称して、不当な条件で働かせるなど）や土地の権利の問題などがある。

西ティモールの東ティモール人難民問題に関しては、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）とUNTAET（国連東ティモール暫定統治機構）が担当している。難民救済の仕事ははかどっていない。西ティモール難民と東ティモール住民の和解は民兵に阻まれている<sup>(5)</sup>。UNTAETの和解委員会にはYHも関わっている。和解は正義と公正に基づいて行われるべきである。プログラムが公正に行われ、きちんと裁かれないと同じことが繰り返される。

75年以前の人権侵害についても、きちんと明らかにすべきである。75年から99年までのケースについては、体験者の証言を確認してゆく作業になる。過去の事実をきちんと知ることと同じ過ちを繰り返さないようにすることがこれからの課題である。当面は99年9月騒乱時の事実を明らかにすることが課題である。

YHは人権アドボカシーとして96年設立、危険を侵して活動してきた。活動は成功しているが、常にマネージメントの透明性に気をつけている。多くのNGOはただお金をもらうために作っているようなものであり、ビジョンが不十分である。YHは最初から明確な目的を持ってやっている。財政の75%は外部（ドナー）からの資金提供である。今の資金提供がなくなっても、オルタナティブが得られるように努力している。

国連やNGOの活動は、最初は援助が目的であっても次第にお金、利益目的に変わってきている。これらは利潤追求、利己主義、消費主義、社会のまとまり、連帯の破壊という、悪い影響を与えつつある。YHの役割はこうした現状を批判しつづけることである。

インドネシアの人権NGO（ジャカルタ）との関係もある。

YHに求められている新しい憲法への貢献は、民衆の声（過去の過ちを繰り返さないように、人々の経験を生かしてほしいという）をモニタリングして、憲法制定議会に提出することである。

YHはお金のためではなく、理想を持って活動している。

以上のように、YHは高い理想を掲げて、新生東ティモールに正義と公正が実現されるよう、活動を続けている。次に取り上げるFOKUPERSは、女性の人権擁護と啓発活動を続ける人権NGOである。

<人権NGOの活動②：FOKUPERS（東ティモール女性フォーラム、以下FOと表記）の場合>

代表のマリア・ドミンガス・フェルナンデス（Maria Domingas Fernandes）氏は選挙活動で

92年、活動を始めた時は理解者がいなかった。

ここで学ぶ子供たちの親代わりになり、生活を指導する女性指導者たちの施設として「ルマ・イブ」(母の家)がある。これに対して「ルマ・パパ」(父の家)も作りたいが、適当な候補者がいない。

家庭での男女の役割を区別する必要はない。

NGOについては、最近批判的な考えである。NGOの人々は、かなり多くの収入を得ているが、お金があればなにかができるという考えが、すでに東ティモールの社会を壊している。NGOはお金に依存する考え方を導入してしまった。お金がなくても土地に根ざした生き方をめざしているので、現在はNGOとの積極的な関係は断っている。

Instituto Sekularは、教会の組織の一部である。ここで3年半教育を受けた後、各地の支部で教育を施している。マリア・テレサの活動のような場所である。貧しい人を救うための活動を行う。

資金的には、彼らの活動を理解して支援してくれる人々がいる。

東ティモールの独立については、インドネシアからの独立は果たしたとしても、自立した人(orang merdeka)になるとはどういうことか、考えねばならない。

東ティモールの経済については、外からの影響を阻止することは難しいが、それに抗する力(自然に根ざした)を身につけることが大切である。

民衆に対する愛が活動の根本である。キリストの人生を通して見て、自分は一人ではないと感じる。「ゴトン・ロヨン」(相互の助け合い)という言葉がインドネシアから入ってくる以前から、東ティモールには同じような考えがあった。それはキリストの教えとかけ離れたものではない。東ティモールの文化とカトリックの文化との関連はもともとあった。

各地の伝統音楽をもとに東ティモールの歌を作っている。また、各地の人々の話から東ティモールの価値観を作ろうとしている。ISMAIKのパーティでは、各地の古いやり方を参考にしながら、新しい東ティモールの文化を作ろうとしている。

薬についても、伝統的な薬草の知識があれば自分で栽培できるので、お金は必要ない。

民衆の知恵をもっと活用していこうと思っている。利潤追求、資本主義にならないように注意しながら、シャンプー、石けん、油などが作れるような小さな工場を作っている。

(インタビューの後、ISMAIKの施設を見学させてもらった。マナルー自らのガイドで、丁字や胡椒、ハーブ類を植えている菜園や山の湧き水を利用した水道などを見せてもらう。東ティモールの自然と民衆の知恵を生かした教育が実践されていた。)

以上、東ティモールの自然や伝統に根ざした生活を理想とするシスター・ルデスの取り組みを見てきた。開発／発展がともすれば資本主義的な貨幣経済を偏重しがちであるのに対して、シスター・ルデスは一貫して異を唱えてきた。東ティモールの民衆の真の幸福とは何かを考え

るとき、こうしたシスターの主張には説得力がある。彼女の実践する民衆の知恵を生かした教育は、これからの東ティモールの発展に必ず生かされるに違いない。以上のように、民衆のための開発／発展を考えると、教育の問題を避けて通ることはできない。そこで、次は学校教育の現状について一例をみてみよう。

#### <教育の問題②：小学校の現状>

以下は、PARCが紛争時に破壊された校舎再建の支援を行っている小学校の校長による談話の概要である。

リキサ県バザールテテ郡レオレマ村レボレマ第11公立小学校は、アントニ・ゴンサルデス校長他、教員7名の学校である。昨年の生徒数は363人（1年生145人、2年生68人、3年生67人、4年生42人、5年生26人、6年生25人）であった。25人が今年卒業した。二部制の学校で、入学テストはない。進級テストはあり、進級時に留年者もある。8年まで在学可能である。今年の生徒数（登録数）は1年生67人、2年生62人、3年生46人、4年生47人、5年生27人、6年生25人である。学年が上がるにつれて生徒が他のリキサ県の学校に行くので、学年が上がるごとに数が減る。

レオレマ村は人口約5800人である。

インドネシア時代の教員数は10人であった。去年の選抜試験以後5人になる。現在校長は1人（地元の人）のほか、ポルトガル語の教員数名、ポルトガル語の先生が2人いる。

男女比はほぼ半々で、6年生（昨年）は男12人、女13人である。

教科書は一部しかない。算数、地理、社会の教科書がある。表紙と序文（シャナナ・グスマン著）の他はインドネシア製である。歴史の教科書はまだできていない。基本的人権については教科書がない。

授業は1、2年がポルトガル語、3～6年がインドネシア語で行っている。4～6年のポルトガル語の授業は少ない。UNTAETの文字教育もある。学校ではテトゥン語で教えるべきだと校長は思っている（しかし政府の方針なので逆らえない）。

教員の給料はUNTAETから東ティモール政府に移ることで、減った（月100ドルくらい）。

ポルトガル時代、女性は大学まではほとんど行けなかった。インドネシア時代は、女性も高等教育が受けられるようになった。教育だけならインドネシア時代の方が良かった。

校長はポルトガル語ができない。校長の代わりになれる人もいない。

時間割りは校長が指示し、教員全員で作る。

ポルトガル語はCNRT（ティモール抵抗民族評議会）のリーダーたちの言語である。教育言語が将来すべてポルトガル語になれば、現在の校長他教員全員は辞めなければならない。

給料は大変少ない（ドルで支給）。先生になりたい子供はたくさんいる。子供の90%くらいは先生を尊敬している（と校長は感じている）。

1999年9月騒乱時に東ティモール全土の学校施設は破壊され、しばらくは校舎もない状態が続いていたが、PARCのようなNGOの協力もあり、ようやく再建され始めた。上記のように、教科書や教育言語の問題など、今後の教育発展の課題は多い。次に村落社会の復興の状況はどうであろうか。今回のツアーで訪れたひとつの村の事例をみよう。

#### <村落社会の復興：マキダル村の場合>

YHが復興を援助する村であるサメ県アラス郡マキダル村ナブララン部落にて、長老マテウス・ダ・コンシサウンの話を聞く。ナブラランはこの当たりの村の中心地で、集会所になっている。

ナブラランには8世帯が住んでいる。26世帯は99年騒乱時に西ティモール・アタンブアに避難して以来、まだ戻っていない。この村にはポルトガル時代から住んでいる。生業は水田(米)トウモロコシ、キャッサバ、ココヤシの栽培。家畜は水牛、馬、豚、鶏、山羊を飼っている。ほとんどの物は自家消費する。米は少し売っている。

アラスのテトゥン語は人称敬語が残っており、ディリのテトゥン語よりも古い伝統的テトゥン語といわれる。

アタンブアにいる人々は民兵で、現在ここにいる人の家族を1人殺した。仕返しされるのを恐れている。長老も髭を剃られた。理由は克蘭デスティン(FALINTILファリンティール、東ティモール民族解放戦線の支援者)として重要な役割をしていたためである。ここに残っている人々はみな克蘭デスティンだった。そのことは秘密にしていたが、99年、民兵の集まりに来ない人々はみな自動的に敵とみなされた。

75年当時、長老はファリンティールのメンバー(30人の小隊の司令官)だった。

アタンブアにいる人々が戻ってきたいと言えば戻ってきてもいいと思っている。ここの住民たちは、条件付きで受け入れる。家を焼いたり、殺したりした人々は裁かれるべきだ。民兵たちのリーダーについても同様である。

インドネシア時代と今の違いは、自由の有無である。昔は山に登ってもファリンティールと疑われたが、今は自由に行動できる。

現在困っていることは、水田の作業が手作業で時間がかかることだ。水牛が足りない(牛だと5倍時間がかかる)。

米は直撒きで、田植えはしない。ポルトガル時代から一期作でやってきた。今年は二期作をやっている(インドネシアから解放されてやる気がでてきた)。農民自身、YHが来る前から自覚があったが、YHが来てからよりやる気がでてきて、うれしくなった。YHのスタッフのナンド氏がこの村の出身でYHとの関わりができた。

UNTAETがこの村に来た。また、ポルトガルの農民グループが来てクレジットを出すという予定である。長老のイトコ、マヌさんがポルトガルにいて、交渉している。マキダル村を

含むアラス郡の5つの村（行政上の村長、伝統的慣習法の長の会議）で合意ができれば、受け入れる。

村長、慣習法の長をポルトガルに招待するというようなやり方はしない（後で村人たちに説明できないから）。

その他、長老の弟がブドウ（ワイン用）をポルトガル向けに作ることを提案しているという話を聞く。

以上のように、東ティモールの村落社会はインドネシア統治時代、軍の厳しい監視下におかれ、行動の自由を制限されてきた。また、99年9月の騒乱時には村人がインドネシアからの独立派と残留派の二つに分断され、その傷跡は今も生々しく残っている。西ティモールに逃れた残留派の人々が今後帰還してきた時にどのように残った村人たちと和解ができるのかという、困難な課題も待ち受けている。しかし、その反面、長い抑圧からようやく解放されたという喜びもまた大きい。これからの東ティモールの国づくりが順調に進んでいくかどうかは、こうした民衆社会の健全な発展にかかっている。

#### 4. 東南アジアの開発／発展におけるNGOの貢献

以上、タイと東ティモールの事例を通して、東南アジアにおける開発／発展の課題に取り組むNGOの活動についてみてきた。タイの場合はダム、水域開発と教育、東ティモールの場合は復興支援、人権、教育といったテーマにかかわる活動を取り上げた。それぞれ具体的な課題は異なるが、根底には共通のテーマが垣間見えた。すなわち、民衆の視点からの発展とそれを支援する真に民主的な取り組みの必要性である。

近年にいたるまで、東南アジア諸国では非民主的で抑圧的な体制の下で、強権的な開発独裁体制が続いてきた。本稿（前号掲載）で取り上げたタイの事例はまさにその典型であった。しかし、国により程度は異なるが、グローバル化のプラスの効果としての民主化に伴い、NGOの活動が許容される範囲が大きく広がってきた。これによって、本稿で見えてきたようなさまざまな分野でのNGOの貢献が認められるようになったのである。特に長い植民地支配と抑圧を被ってきた新生国家東ティモールは、今後も国際社会とNGOの支援なしでは到底国づくりを進めることができないだろう。

ここで取り上げた日本のNGO（メコン・ウォッチ、PARC）そしてタイ、東ティモールのNGOおよび関連民衆団体は、いずれもアジア諸地域の開発、発展の問題にそれぞれの立場から一貫して取り組み、着実な成果を挙げてきた。人間開発、社会開発という新しい開発／発展のパラダイムを生み出してきたこうしたNGOの活動は、人権、教育、環境問題というグローバル化時代の人類共通の課題について、私たちに何ができるのかという問いかけに対して、ひとつの有力な回答を与えてくれているように思われる。それは同じ地球の上に生き



る仲間として、世界の人々と連帯し、ともに考え、ともに行動するアリーナを作ろうということであろう。まだまだこうした取り組みは始まったばかりである。しかし、21世紀の新たな世界の展望は、こうした努力の向こうにほのかに、しかし確実に拓かれつつあるといえよう。  
(完)

## 注

- (1) 東ティモールの植民地支配の歴史および独立問題に関しては近年多数の文献があるが、日本語で読めるものとしては、さしあたり以下のようなものがあげられる。  
伊勢崎賢治『東チモール県知事日記』、藤原書店、2001年。南風島渉『いつかコロサエの森で：東ティモール・ゼロからの出発』、コモンズ、2000年。高橋奈緒子・益岡賢・文珠幹夫『東ティモール：奪われた独立・自由への戦い（明石ブックレット7）』、明石書店、1999年。高橋奈緒子・益岡健・文珠幹夫『東ティモール2：「住民投票」後の状況と「正義」の行方（明石ブックレット11）』、明石書店、2000年。ロイ・パクパハン『東ティモール：独立への道（ニンジャ・ブックレットNo. 3）』、コモンズ、1999年。古沢希代子・松野明久『ナクロマ：東ティモール民族独立小史』、日本評論社、1993年。
- (2) 本節の歴史と現状をまとめるにあたっては、高橋・益岡・文珠（1999年）前掲書(注1)、ロイ・パクパハン前掲書(注1)、古沢・益岡前掲書(注1)を参考にした。
- (3) 本節の東ティモール・NGOの現状に関する内容は、2001年8月20～29日に行われたPARC主催のスタディ・ツアーの際の聞き取りに基づく。なお、東ティモールの現状およびPARCの活動に関する全般的な情報は、以下のPARCホームページのサイト<http://www.parc-jp.org/coop/timor/>を参照されたい。
- (4) YAYASAN HAKの住所、メールアドレスは以下の通りである。  
Jln.Gov.Serpa Rosa T-091,Farol,Dili,Timor Lorosae,PO Box 274  
zeus@yayasanhak.minihub.org
- (5) 1999年9月の騒乱時に、併合派の民兵たちによって強制的に西ティモールに移送させられた10万人に及ぶ（2000年当時）難民が、まだ東ティモールへの帰還を果たせず西ティモールの難民キャンプに留まっている。人権団体によれば、難民の80％は老人か子どもであるという。難民キャンプでの生活は過酷で、食料、生活物資が不足し、衛生状態は悪く、ストレス・病気が蔓延している。また、民兵による暴力も多数報告されている。難民の多くは東ティモールへの帰還を希望しているが、民兵に阻まれているため、帰還は徐々にしか進んでいない。また、インドネシア時代に公務員、警察、軍といったインドネシア政府関係の仕事についていた人たちや、民兵に脅されてとはいえ、インドネシア残留を「希望」した人たち、あるいは元民兵だったが今は帰還を希望する人たちを、いかに東ティモールに帰還させ、和解させるかが、大きな課題となっている。[高橋・益岡・文珠（2000年）前掲書（注1）50-57頁。]
- (6) FOKUPERSの代表、マリア・ドミンガス・フェルナンデス氏は、筆者たちの2001年8月下旬の訪問時、9月1日に実施される制憲議会選挙に独立（無所属）候補として立候補していたため、選挙キャンペーンで多忙であった。
- (7) FOKUPERSの住所、メールアドレスは以下の通りである。

---

Rua Gov.Celestino da Silva,No.27,Farol,Dili,Timor Lorosae

fokupers@fokupers.minihub.org

- (8) 「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」とは、妊娠・出産をめぐる女性の自己決定権のことである。避妊などの出生調整手段は、女性の自己決定権を行使する手段の一つであり、その権利行使を保障する女性の身体にとって安全・安心な家族計画サービスの充実とそれに接近する自由が強調される。1994年9月に国連の主催によりカイロで開催された第3回国際人口開発会議（ICPD、カイロ会議）で、女性のエンパワーメント（地位の強化）とリプロダクティブ・ヘルス/ライツという新しい指導理念の下で家族計画を進めることを勧告する行動計画が採択された。[後藤澄江・田淵六郎ほか『グローバリゼーションと家族・コミュニティ』54-55頁（文化書房博文社、2002年）。] 東ティモールはカトリックの影響が強いため、出生調整を女性の権利として認めるという考えには一般的に抵抗が強い。
- (9) ISMAIKの活動については、以下に掲げるシスター・ルデスの著書に詳しい解説がある。  
Maria de Lourdes Martins, *Kelompok Gerejani Basis: Upaya Menumbuhkan Gereja dari Bawah*, (Dili: Yayasan HAK & Sahe Institute for Liberation,2001)
- (10) 「プリプミ」とはインドネシア語で「土地の民」のこと、すなわちここでは東ティモール人のことを指す。

---

E-mail : kotorii@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp

